

---

# 世守り地蔵と神守り男

綴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世守り地蔵と神守り男

### 【Nコード】

N8166W

### 【作者名】

綴

### 【あらすじ】

ある日学校帰りに見上げた空を、7体のお地蔵様が歩いていた！？

那緒は中学2年。空を見上げてあるいていたら、大きな足跡がいくつもついていた。

頭の心配をしながら歩いていた那緒は、前からきた人にぶつかってしまふ。

見上げた先には、銀色の長髪がキレイな……。

## 始まりの詩（前書き）

2 作目書いてみます！これから頑張りますのでよろしく願いします。

よければもう一つのほつもどろぞ読んでみてくださいね。

## 始まりの詩

涙とかして 空に混ぜて  
広い空を、まっさおに

歩く地蔵は空踏み固め、歩き回って界守る<sup>かい</sup>  
神守り人<sup>かみも びと</sup>は、呪<sup>まじ</sup>を使い  
眠る神の御心<sup>みこころ</sup>を揮<sup>ふる</sup>う

はじめましょう、はじめましょう

光あふるる少女の御霊<sup>みたま</sup>で  
闇の側面<sup>かたむち</sup>見<sup>み</sup>てみましょう

亀裂<sup>きれつ</sup>の隙間<sup>すきま</sup>から出<sup>で</sup>る冷気を  
封じ石の透間<sup>すけま</sup>から視<sup>み</sup>てみましょう

見えないものを怖がるならば 視えるものを恐れるならば  
立てし誓いを守るべく 愛しき人を護るべく  
その手を、振り下ろされた剣<sup>けん</sup>に向けましょう

垂れた腕の先にある、己が武器を構え  
迫りくる脅威に備えましょう

いつか見た、あの微笑みを  
いつか視た、あの切なさを  
いつか感じた、その偉大さを

心のなかではぐくんで

芽が出るいつかを 待ちながら

## 1話（前書き）

一話だけ。

## 1話

那緒はそのとき、散歩していた。天気がいいから散歩してきな、知らない人についていっちゃいけないよと母に言われて。

「いい天気だなー。ていうかお母さんわたしを何歳だと思ってるんだよ、本当に……」

はあっと大きく息をはく。

晴れた空にはポツンポツンと雲が浮かび、柔らかな風是那緒の気持ちと和ませた。

「なんか面白いことないかなー……って、んん？」

大きな足跡がいくつも空についている。いくつも、空に。

足跡が空にいくつも、浮かぶのではなくちゃんと踏んだふうについている。

「……」

那緒は無言でごしごし、と目をこすった。

すっかりこすった後、こすりすぎて涙が浮かぶ目でもう一度空を見上げる。しかしそこには、変わらず青い空と白い雲、踏まれた部分だけが少し濃い青色になった足跡があった。

「な、にこれ……？　そうか、わたし目にゴミが入っちゃったんだ、うんきつとそうだ。自分じゃ取れないところに入っちゃってるのかも。帰ってお母さんにとってもらおう」

どこの世界にも目に入るだけで空に足跡があるように映るゴミなんてものはない。

混乱した頭は、奇妙に一部分冷静になっている。そんなゴミがあるわけないと分かっているも、しかし自分がおかしいのかとは考えたくはない。

「うん、やっぱ帰ろう。それがいい……っ痛！！」

「え？」

振り返ってきた道を戻り始めた那緒に正面から何かがぶつかった。

そこにあつた何かに顔を強打した那緒は、苛立ちもあらわに前の何かを見上げた。

「痛いんですが!？」

「あ、本当にごめんなさいね。まさかぶつかるとは思ってたのよ」

心の底から反省してます、といった感じの相手に、ぼかんとした。

相手の本当に悪いと思っっている雰囲気にも驚きだが、何よりもその容姿に驚いて。

腰まで伸びた長い髪は銀色に輝き、絹糸のようにさらさらと揺れる。優しい顔は、何も言わない那緒を見つめて心配している。

「大丈夫？」

相手の身長は高く、頭上から降ってくる柔らかな声は耳にすんなりと入ってくる。

(そういえば、キスするのに一番いい身長差って15センチだった?)

高い身長、ということから連想して何を考えているんだ自分!! 相手女性でしょ!?! ……と心の中で叫ぶ。

「あの〜？」

「え、あつ。ごめんなさい、わたしも悪いんです。ぶつかったのって電柱かなにかだと思ったから、つい失礼なことを……。怪我とかしてませんか？」

こちらこそごめんなさいと謝る那緒に、相手はほわり、と笑った。

「ああ、いいんですよ。怪我はしてませんし」

よかつた〜! と那緒は笑った。

「ところで、こちら辺ではあまり見かけないですけどもしかして道に迷っちゃったんですか？」

「え、ああ……うん、そういうことになるかもしれないわね」

「女性なのに、こんなところにいたら危ないと思いますよ? この辺人通り少ないし」

そうなの？　ありがとう、と笑うその人の声を突然聞こえた笑い声がさえぎった。

『は、あははははは！　娘さんや、それは女性などではないぞ？』  
ん？　と辺りを見回す那緒に、さらに笑い声の主は告げる。

『わしたちはそこにはいないぞ』

なんのことだかわかないが面倒事の匂いがする。

そう判断した那緒は一応（仮）女性に声をかけた。

「すみません、急用を思い出したので帰ります。あなたも気を付けて帰ってくださいね」

「え？　あ、ありがとう」

（仮）女性は無言ながらも応じる。

しかし那緒が見えなくなると、その顔から戸惑いの表情は消えた。

「ん」。あの子、お前の声が聞こえていたのかしら？

その場にはその人しかいないのに、その人はまるで誰かに話しかけるかのように声を発した。

『あの反応ではそうだろうな。しかしそのなり、どうにかならんのか。あの娘も勘違いしているようだったが』

「いいわよ、べつに。それよりもあの子で間違いないのね？」

『ああ』

返ってきた声にやりと笑う。

「やっと、見つけた」

その笑顔は日に照らされているはずなのに、どこか陰ったような笑みだった。

## 2話

「こんにちは」

公園のベンチに座って砂場で遊んでいる子たちを見ていた那緒は、聞き覚えのある声に振り返った。

「あ、こんにちは」

そこに立っていたのは、昨日会った銀髪の女性だった。

日の光でキラキラと輝いているが、不思議と眩しいとは思わなかった。女性はそのまま那緒の隣に座ると、那緒に向かって柔らかくほほえんだ。

「昨日はごめんなさい。ぶつけたところは大丈夫？」

「大丈夫です。あのあと少し赤くなっただけど、すぐに治りました」

そう、よかった。安心したようにそう言つと、女性はまた話し出した。

「実は昨日、なんだかよく分からない変なものを見てしまって……」「変なもの？」

那緒が訊き返すと、女性は少し声を落として「信じてね？」と言つて小さく息を吸った。その草草さえもかわいらしくて、那緒は素敵な人だな、と素直に思った。

「実は……が、空にあったの」

「え？」

「空に、足跡が、あつたの！」

声を抑えたまま興奮したように言つと、「あなたも、見た？」と自分を落ち着かせるように那緒に言った。

「見ました」

きつぱりと言い切った那緒に、女性は嬉しげに顔を緩ませた。

「やつぱり……！ 実はわたしがあなたにぶつかってしまったのも、空にある足跡を見上げたまま歩き出したせいなのよ」

昨日ぶつかってしまった理由を言つと、彼女は自己紹介をした。

「わたしは織部志津摩おしへしつじです。志津摩つじって呼んでね」  
「わたしは高橋那緒です。那緒なちよって呼んでください」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8166w/>

---

世守り地蔵と神守り男

2012年1月1日22時46分発行